設楽発掘通信
No.21
平成28年
8月号

川向東貝津遺跡の地元説明会を開催しました。

本年度の川向東貝津遺跡の発掘調査は六月から開始し、八月現在、調査は終盤に向かっています。

昨年度の調査では、縄文時代中期と後期の遺構（今から五千年前～四千四百年前）を検出する事ができました。代表的な遺構としては、中期では竪穴建物跡が四棟、後期では竪穴建物跡二棟と、時期は不詳ですが多数の集石土坑があげられます。なお、さらに下層では縄文時代草創期（今から約一万五千年前頃）と後期旧石器時代（今から約一万八千年前頃）の遺物が出土する層位も確認されました。

本年度の調査は、昨年度に確認された縄文時代草創期と後期旧石器時代の遺物が出土する層位を調査対象としました。その結果、境川の古い河道を確認し、その南側と北西部で石器の集中地点を確認する事ができました。

調査が一段落した七月二十三日には、これらの石器の出土状況を紹介するため、地元説明会を開催しましたところ、地元の方々を中心に六十名にご参加いただきました。誠にありがとうございました。

（愛知県埋蔵文化財センター　池本正明）

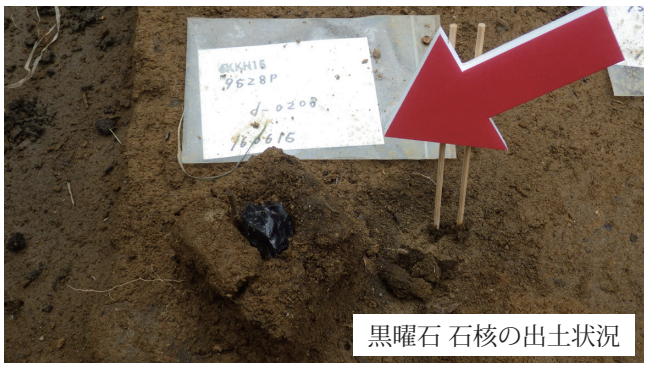
黒曜石 石核の出土状況

写真１　川向東貝津遺跡 地元説明会の様子

滝瀬遺跡の発掘調査

滝瀬遺跡の調査は開始からおよそ三ヶ月が経ち、折り返し地点をむかえています。A区（調査区東部）は、一部の重要な遺構を残してほぼ終了しました。残る調査は前号でもお伝えした南部にある竪穴建物跡と、北部にある礫が集中する部分（配石遺構などの可能性が考えられます）の補足調査のみとなりました。A区の調査範囲では後世の耕作によって削平された部分もありましたが、特に川側を中心に遺跡の広がっている様子が観察されました。また山側では、まとまった量の遺物を包含する縄文時代後期前葉（今から約四千年前）の黒色土層が確認されました。この層の中には、配石遺構などを構成する河原などから持ち込まれた礫のほか、遺物が多く含まれており、打製石斧（土掘り具）など特に石器が目立ちました。石器以外にも、A区では土器も多く出土しました。出土した土器は、縄文時代後期前葉から中葉（今から四千年前～三千八百年前頃）のものが中心となっています。また、古いものでは縄文時代早期（約九千五百年前）の土器片も数点出土しています。縄文時代以外のものとしては、弥生土器と考えられる土器片や山茶碗と呼ばれる中世の焼き物が出土しましたが、縄文土器と比べるとごく少数でした。

現在はB区（調査区西部）の調査を行っています。B区は四区画に分け、南東部をBa区、南西部をBb区、北東部をBc区、北西部をBd区としました。すでにBc区の調査は終了しています。この範囲で検出された遺構は一基のみでした。約五・五×約四・五メートルの隅丸方形をした落ち込みで、深さは約三十センチメートルあります。中央部には焼土が少量見られました。埋土からは、弥生時代末から古墳時代初め（今から約千八百年前）の土器が出土しました。遺構の性格は不明ですが、大きさや形状から竪穴建物の可能性もあります。

現在はBa区とBb区の調査を行っています。Bc区で出土した遺物には、A区では出土しなかった時代のものがありました。今後の調査では、これまでに多く確認された縄文時代のものだけでなく、それ以外の時代の遺跡も広がっていくかもしれません。

（安西工業株式会社　岩瀬大輔）

写真２　滝瀬遺跡 調査区全景（右が北）

川向東貝津遺跡の発掘調査

川向東貝津遺跡からは、多くの尖頭器（手槍や投げ槍の穂先）が出土しました。（写真３）　種類は有舌尖頭器（軸部に茎が附属する）①、木葉形尖頭器（木の葉の形に似る）②～⑤、尖頭器⑥～⑪になります。写真には十一点しか写っていませんが、現在十三点の尖頭器が確認出来ています。

昨年度の出土数九点と合わせて一つの発掘現場から二十二点もの尖頭器が出土するのは愛知県内ではトップクラスとなります。大きさ、形、重さに違いがありますが縄文時代草創期（今から約一万五千年前～約一万一千年前）の研究に大いに役立つ資料となることでしょう。また当遺跡からは、後期旧石器時代（約一万八千年前頃）の細石核（細石刃を作るための母材）や細石刃（細長く剥離したものを骨角などに溝を彫り、そこにたくさん埋め込んで槍先などとして使用）や縄文時代後期から縄文時代晩期（約四千四百年前～約二千五百年前）に作られた石錘（おもり）なども出土していますので、次回でご紹介しようと考えています。

（安西工業株式会社　坂口尚人）

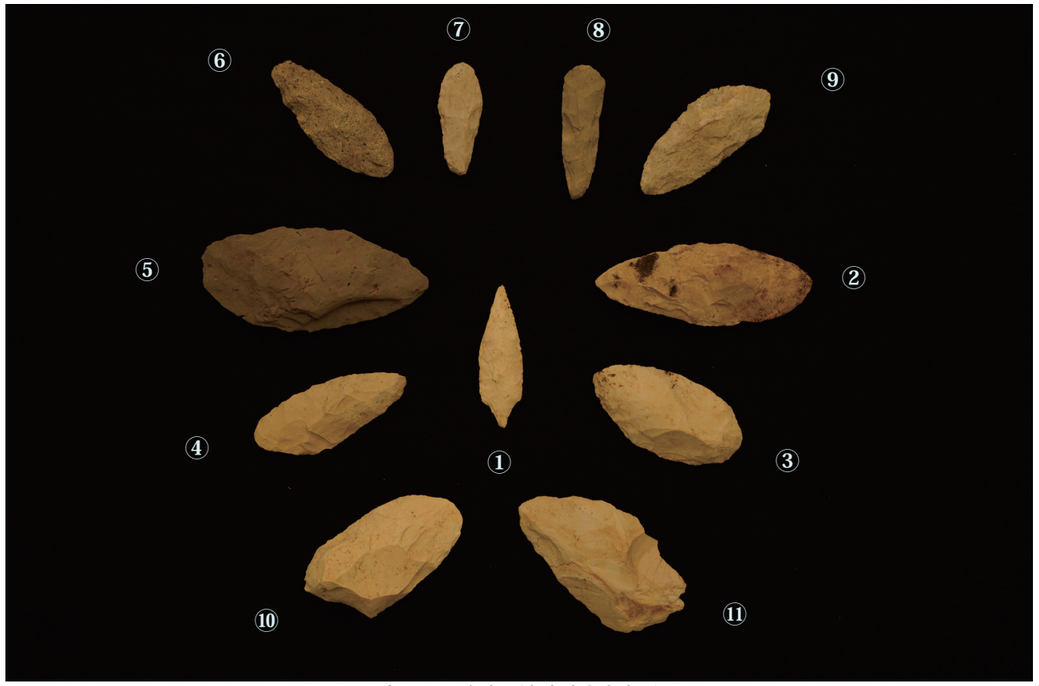

写真３　川向東貝津遺跡出土尖頭器

範囲確認調査

小松地区のマサノ沢遺跡の範囲確認調査を終了した後、出土した遺物の泥を落とす洗浄作業を行いました。洗浄後の観察で、縄文時代後期～晩期（今から約四千四百～二千五百年前）の浅鉢、深鉢などの土器と、打製石斧・刃器、磨製石斧・敲石などの石器（写真４）があることが分かりました。

マサノ沢遺跡の範囲調査では、竪穴建物に伴う石囲炉も検出されており、この地でどのような人々の活動があったのか、今後の調査により明らかになっていくと思います。

（安西工業株式会社　市田英介）

写真４　マサノ沢遺跡出土石器

発掘された蹄鉄

設楽地域の発掘調査・範囲確認調査において、みつかる遺物の中で、最も新しい時代のものとして、蹄鉄があります。設楽地域の調査では馬の蹄鉄が三点みつかっています。一つは滝瀬遺跡でみつかった左前足用と思われるもの、二つ目は万瀬遺跡でみつかった左前足用と思われるもの、三つ目は川向萩ノ平沢遺跡でみつかった左後足用と思われるものがあります。

馬の蹄の形に応じて、大きさには違いがありますが、おおよそ長さと幅が十一センチメートル～十二センチメートルで、厚みは〇・五センチメートル前後です。どの蹄鉄にも蹄の前側を支える鉄唇が接蹄面にわずかに残っていて、接地面は鉄頭がやや上に反る状態（上弯）がみられました。

全体の形態はよく似ているのですが、滝瀬遺跡の蹄鉄は鉄尾端がやや細長く丸くおわる形（写真5上右）、万瀬遺跡と川向萩ノ平沢遺跡の蹄鉄は鉄尾端が直線的にまっすぐ切られる形になっています（同上左・中）。表面観察の写真では分からないのですが、X線写真でみると滝瀬遺跡の蹄鉄を固定した釘孔が七ヶ所あるのみですが（写真5下右）、万瀬遺跡と川向萩ノ平遺跡の蹄鉄には六ヶ所の釘孔と釘孔をつなげる釘溝が左右にみられます（同下左・中）。

この二つのタイプは愛知県のこれまでの発掘調査でも確認されていて、滝瀬遺跡のタイプは春日井市勝川遺跡や新城市欠下城跡にみられ、万瀬遺跡・川向萩ノ平沢遺跡のタイプは、名古屋城三の丸遺跡の第三師団経理部第一倉庫関連の蹄鉄に類例があります。日本に蹄鉄が伝えられたのは江戸時代の末のことで、日本列島に広く普及したのは明治時代に入ってからといわれています。

それでは、この二つのタイプの蹄鉄は、何を意味しているのでしょうか。設楽地域における馬の利用は、より昔から人や物資の移動、農作業などにあったものと思われますが、蹄鉄が使われた時代の違いなのか、蹄鉄の製作者の違いなのか、あるいは馬の種類や利用方法の違いなのでしょうか。いずれにしても、今回紹介しました蹄鉄は設楽地域で馬が活躍した最後の時代の痕跡を示すものといえます。

（愛知県埋蔵文化財センター　蔭山誠一）

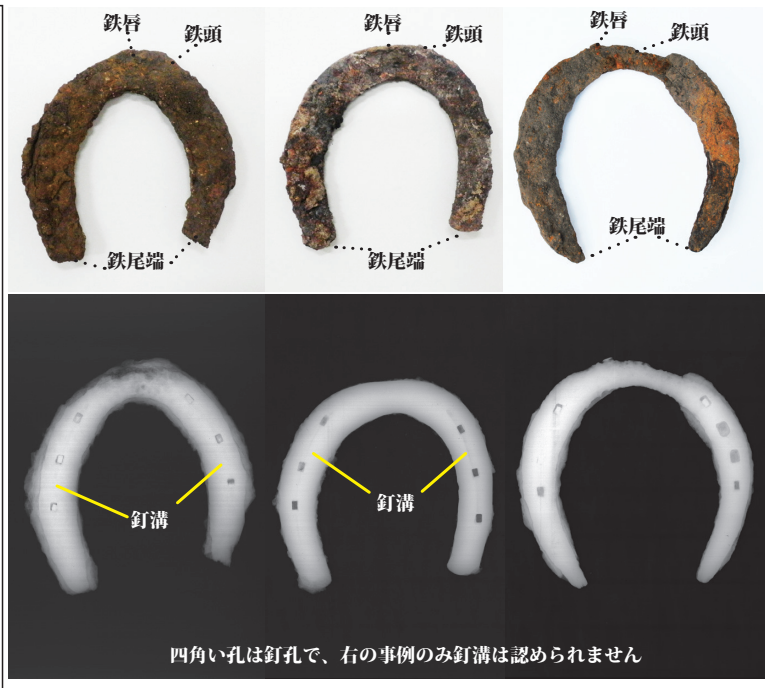

写真５　設楽地域で見つかった蹄鉄（縮尺約４分の１）
【左】川向萩ノ平沢遺跡【中】万瀬遺跡【右】滝瀬遺跡
各資料　上が現況写真・下がＸ線写真

設楽発掘通信 No.21
平成２８年８月号
編集・発行　公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター
〒４９８-００１７　愛知県弥富市前ヶ須町野方８０２の２４
電話　（０５６７）６７-４１６１【管理課】　４１６３【調査課】
ホームページ　http://www.maibun.com
Facebook　https://www.facebook.com/maibunaichi
Twitter　https://twitter.com/aichi_maibun
印刷・協力　安西工業株式会社